養育放棄のもたらす発達遅滞とそこからの回復

日本教育大学院大学、お茶の水女子大学名誉教授　藤永　保

1972 年、小さな町で満六歳と五歳の姉と弟の二人の子どもが一年半にわたり戸外の小屋に放置されていたのがみつかり救出される事件がありました。当時連日の報道ぶりは、こうした虐待・遺棄は稀有なこととみられていた時代規範をよく物語っています。

私はたまたまこの事例にかかわり、以後約 20 年にわたってその後の二人の成長過程を追ってきました。最初に驚かされたのは、二人が極限といってよい発達遅滞状態にあったことです。ともに身長は 80 センチ、体重は 8 キロ、つかまり立ちといざり歩き、姉が 3〜5 語、弟はゼロ語であり、心身ともに一歳程度の発達水準にありました。発達指数（ＤＱ）に直すと 20 以下、それまでの事例報告にも類のないものでした。兄姉や妹との比較検討と生育環境調査の結果から、遅滞の原因は出生直後からの極端な心身両面にわたる養育環境の貧困にあることが確められました。

二人は、救出後乳児院を経て養護施設に収容され親身な養育を受けました。この分野の権威スピッツ・Ｒは、初期養育の貧困による遅滞は専門的養育を受けてもＤＱ損失の三分の一を回復できるだけと唱えていましたが、二人はこの予測を裏切って順調に成長し自立した家庭人・社会人として暮しています。人間発達の可塑性の大きさを知るべきです。

しかし、遅滞からの回復は必ずしも順調一方であったとはいえません。言語発達については、姉と弟との当初の差異がだんだん広がっていったので担当保育者の交替を試み、ここからようやく弟の本格的発達が始まりました。これによって、養育者への愛着形成が言語発達の必要条件の一つであることが明らかとなりました。

体位の回復も、救出直後の爆発的成長が目覚しいという法則性が確認され、その勢いは青年期まで続いたものの以後は頭打ちとなって、最終到達水準は平均よりかなり低い水準に止まりました。

認知能力については、ビネー・ウィスク知能検査成績の伸びは当初は目覚しかったが、やがてＩＱ80 で頭打ちとなりました。これらの分野の回復の様相は、初期の伸長は著しいが、平均の水準にまで至らず止るという共通の特徴が認められるようです。初期発達における養育環境の働きには、やはり臨界期的効果が否定できないこと、それだけにさらにいっそう養育者との愛着関係の重要なことが再確認されます。

心が心になること

専修大学文学部　吉田弘道

はじめに

これまでに筆者は、自閉症児や染色体異常などの発達障害児に対して発達援助的なかかわりを行ってきた。また並行して、人格障害の青年や成人に対して心理療法的かかわりを行ってきた。発達障害児は長くかかわったもので 20 年近い方がいる。一方、人格障害とされる方も 10 数年におよぶ心理面接を続けている方がいる。さらに、知的障害者施設の心理職員とスーパービジョンの形でかかわりを持ちながら、発達障害児といわれた方がその後青年期や成人期になったときに、どのような成長を遂げているのかを教えてもらっている。

このような仕事を続けてきて、いったい人の心の何がどのように発達すると、その人が生きていきやすくなるのか、と考えることが多くなった。たとえば、知的障害のある発達障害者で、人との社会的な付き合いをもちながら元気に楽しく生活している人がいる。そうかと思えば、知的発達は何の問題がないにもかかわらず、人との社会的な付き合いと、社会的な活動ができず、周りから見て楽しそうに見えない生活を続けている人格障害の人もいる。また、養護学校の高等部までは、それなりに安定した生活と対人関係を維持してきた知的障害者が、卒業後に自らの行動を律することができずに、家族と本人が困ってしまっている人もいる。このような人たちから教えられることは、人がそれなりに生きていくには、知的発達だけが重要なのではないということである。

以上のような体験と考えをもとに、「心が心になること」が大切であり、そうなるようなかかわりを周りの大人は子どもや、心がまだ心になる途中にある人に行っていく方法について報告する。

１．心が心になるとは

「心が心になること」とは、知的に発達していることはそれなりに助けになるが、それだけではなく、自分・自己という意識が明確にあり、そして心の中心に自分・自己ができていて、自分が自分の考えや意志、感情や気持ち、自分の感覚や外からの情報、行動、運動や姿勢、などを把握していて、同時に、他者の気持ちを理解して、他者とのコミュニケーションができ、さらに、それなりに自分がまとまっていて、主体的に、統制された行動がとれることをいう。このように発達していると、もしかすると、知的障害がある・ないにかかわらず、その人なりの能力を使って、それなりに生きていけるのではないかと思うのである。このような筆者の考えは、以下の Fonagy らの考えを受けてより強まっていった。

Fonagy ら（Fonagy et al,2002)は「メンタライゼーション（mentalization)」の概念を提起した。mentalization は造語であり、そのままメンタライゼーションということにする。メンタライゼーションとは、子どもが他者の行動、信念、感情、態度、願望、希望、知識、想像、ふり、嘘、意図、計画などに応じることを可能にする能力、他者の心を読むことを可能にする能力、他者の行動が意味づけられ、予測可能なものにする能力である。またメンタライゼーションは、他者の心だ

けでなく、子ども自身の心を知ることにも関係している。それは、子どもが他者の心を理解することが自己の心の状態を自覚する能力につながり、他者の行動の意味を探ることによって、自分自身の心的体験を意味づけることができるようになるからである。すなわち、メンタライゼーションは、子どもの自己および他者の心的状態を想像する能力とも関係している。

さらに、メンタライゼーションする能力は、「自己の組織化（self-organization）」および情動調節(emotional regulation)の主たる決定因であるとも考えられている。自己の組織化とは、自己を中核として心がまとまっていること、子どもが自分の心を知ってまとめあげていること 、自分の周りの情報を処理しつつ、また自分を見つめながら、自分をモニターしながら行動できることをいう（図１）。したがって、自己の組織化ができている子どもは、行動統制や情動調節ができるのである。

メンタライゼーションは、最初は子どもが親との愛着関係において、両者の間の出来事を解釈する際に使われるが、その後は親以外の対人関係でも使われるように発展していく。

２．心が心になることを助ける対応

Fonagy らは、メンタライゼーションの発達を助けるかかわりとして、「映し返し機能（reflective function）」を提唱した。この機能は、母親が子どもの信念、感情、態度、願望、希望、知識、想像、ふり、嘘、意図などの心的状態に関心をもち、言葉と態度で触れて子どもに返す機能である（図２）。この機能が、子どもの感情発達や情緒調節の能力を高めることに役立ち、さらに、子どもの自己としてのまとまり、すなわち自己の組織化の発達を促すとされている。また同時に映し返し機能は、母親が自己の心的状態をわかりやすく子どもに伝えることも含んでいるので、この映し返しがなされると、子どもは母親の心的状態が理解しやすく、これが翻って、自己の組織化を高めるという循環的効果があることになる。以上のような Fonagy らの主張は、古くはアタッチメントの人格の構造化に果たす役割を初めて強調した Sroufe と Waters(1977)の主張を発展させたものといえるが、それをより細かく理論化している点で貴重であるといえる。

上に述べたことから予測できることではあるが、映し返しを適切に行っている親に育てられている乳幼児は、安定したアタッチメントを形成していることが多く、そのような幼児は、不安定なアタッチメントを形成している幼児に比べて、「心の理論」（theory of mind）がより発達していることが確認されている（Fonagy,1997）。また、このようなアタッチメントの質と感情発達との関係については多くの研究がなされている（吉田 2000）。たとえば、母親との間に安定したアタッチメントを形成している幼児（タイプ B）は、身体的な興奮を調節する能力、および、感情の自己制御の能力が高く、また、感情を分化して感じることと表現することがよくできるということである（ven-den-Kolk & Fisler,1994）。これには親子の相互作用が反映されている。すなわち、子どもの情緒状態や考えていること、欲していることに関心をもって言葉でふれる相互作用、そしてまた、感情について話をすることが多い親子の相互作用が、子どもの自己の感情を語る能力と、他者の感情を理解する能力を高めるということである（園田、1999; Dunn et al,1999）。

以上述べたことを理論的基礎に置きながら、メンタライゼーションの発達を目的としての適切な

かかわりが、発達途上にある幼児や、発達障害児、精神障害者に対してさまざまな機会をとらえて、行なわれていくことを期待している（図３）。

３．さまざまな対象に

近年発達障害児や障害者の自己の発達や自我同一性の発達を支援することへの関心が高まっている。たとえば杉山（2000）は、高機能自閉症の自我同一性の障害や、自己の体験の再構成困難に対応するために、彼らの内的体験に注目することの必要性を述べている。また田中ら（200７）も、発達障害児の自己に注目し、行動の統制にかかわる自己の発達を支えるためには、認知的な自己よりも、行為主体としての自己感を高めることが必要であるとしている。さらに、具体的な方法としては、快の情動を共有する体験や、周りの人が子どもの気持ちを感じて代弁することなどを挙げている。このような面に関心が高まってくることは、障害児の、受動的行動の増大や、自己の能動性や主体性の弱体化傾向を防ぐものとして喜ばしいことである。

筆者も、さまざまな面の発達と共にメンタライゼーションの発達を視野に置きながら、自閉症児や人格障害者への心理療法を行っている。ある自閉症児では、子どもの内面の動きを感じる母親の感受性を励ましながら、母親の映し返し機能を高めることをねらった母親面接を行った。その結果、母子関係が安定し、子どもの行動が落ち着くとともに、自我の統制機能が高まることが生じた。また、子ども自身も、母親の内的状態・心情を感じて共感する動きがみらるようになった（吉田ほか、2005）。

４．関係を重視したかかわり、メンタライゼーション、脳の発達

適切な親子関係や適切なかかわりが、メンタライゼーションや自己の組織化に関係していることを述べてきた。かかわりとメンタライゼーションや自己の組織化との関係については、おそらく今後脳科学との関係で研究が進んでいき、行動や心理的かかわりの妥当性が、脳の発達の測面から確認されるのではないかと期待している。この点について筆者は門外漢ではあるが、常に関心を払っているところである。

たとえばLevin（1991）は、出生直後から活動している小脳が行動制御と自己の組織化に重要な役割を果たしている可能性、および、小脳ー皮質連絡網と身体的自己感との関連性について紹介している。そうであるならば、生後初期からの母子のかかわりは、自己感の発達にとって脳の発達の観点からも重要となってくる。また自己制御の発達には、情動調節、感情調節が重要な要素であるが、飯村ら（2007）は、感情や衝動の調節に関係している大脳辺縁系の海馬が、胎児期にストレスを受けて神経新生が減少していたとしても、出生後に母親のグルーミングによって神経新生が回復することを、ラットの研究結果として紹介している。このような研究が今後
増えてくると、それらの治験をもとに、心を心にするために、より役に立つ対応方法が提案されるようになるかもしれない。

文献

Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., et al. Young children’s understanding of other people’s

feeling and beliefs: Individual differences and their antecedents. Child Development, 62 , 1352-1366. 1999

Fonagy, P., & Target, M. Attachment and reflective function: Their role in self-organization. Development and Psychopathology.9,679-700、1997

Fonagy, P., Gergely, G., Jurist, E.L., & Target, M. Affect regulation, mentalization, and the development of the self.　Other Press. 2002

飯村美歩、岡本正洋、征矢英昭、脳の発達から考える子育て：生後の海馬の発達に及ぼす母子関係、小児保健研究、66、395-401、2007

Levin ,F.M 著, 西川 隆、水田 一郎、竹友 安彦訳、心の地図―精神分析学と神経科学の交差点、ミネルヴァ書房、2005

園田菜摘　1999　３歳児の欲求、感情、信念の理解：個人差の特徴と母子相互作用との関連.　発達心理学研究,10,177－188.

Sroufe, L., & Waters, E. 1977 Attachment as an organizational construct. Child Development,48,1184-1199.

杉山登志郎、自閉症の体験世界：高機能自閉症臨床研究から、小児の精神と神経、404，88－100、2000

田中道治、都築　学、別府　哲、小島道生編、発達障害のある子どもの自己を育てる－内面世界の成長を支える教育・支援－、ナカニシヤ出版、2007

van-der-Kolk, B.A., & Fisler, R.E. Childhood abuse and negrect and loss of self-regulation. Bullten of Meninger Clinic,58,145-168,　1994

吉田弘道、情緒面をどう育てるか：人との相互作用を通して. 小児科臨床,53,増刊号,1223-1226、2000

吉田弘道、高田夏子、乾　吉佑、自閉症児の親面接の新しい役割 - 子どものメンタライゼーションと自己組織化を促す写し返し機能に着目して - 、専修人文論集、77 号、109-133、2005

図1　自己の組織化(self-organization)

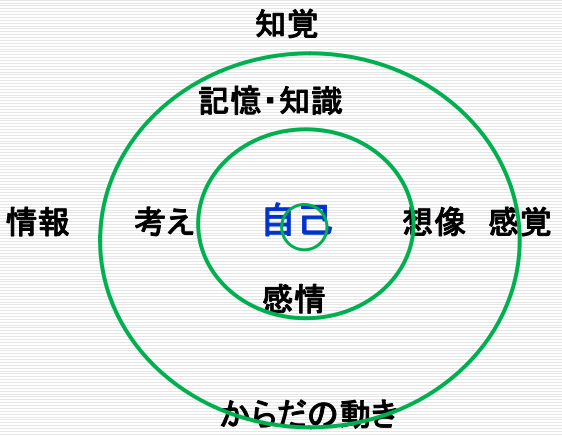

図2　映し返し

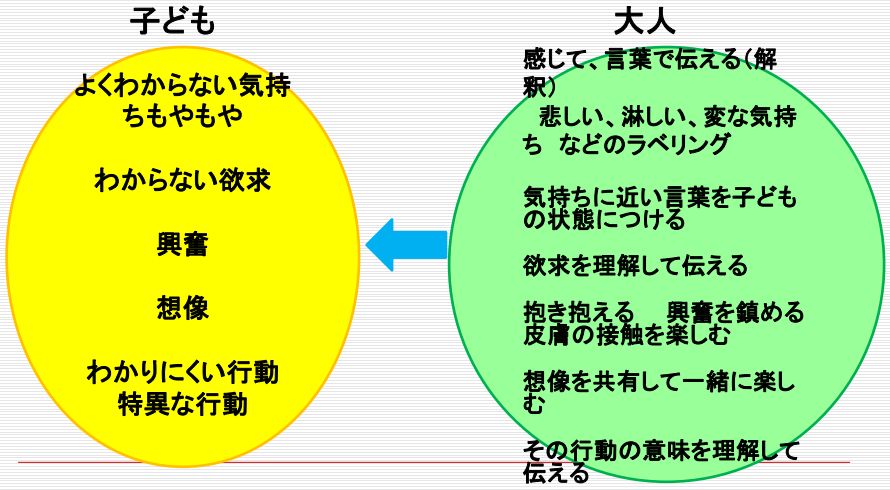
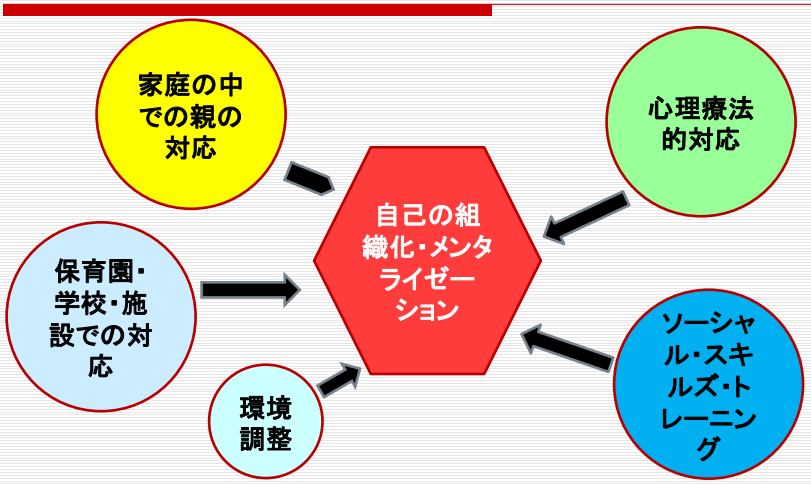
図3　メンタライゼーションへのさまざまな取り組み